電脳遊戯

ユユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電脳遊戯

【Ｎコード】
Ｎ８８３８Ｚ

【作者名】
ユユキ

【あらすじ】
ツイッター、ブログには疎いので、代わりに宣伝してくれると幸いです。
かなりの長編になる予定。長い目で見てください。

プロローグ（上）

設定は近未来。この世界は魔法少女に支配されている。
と、言ったらラブコメを彷彿とさせるが、むしろ逆だ。
ラブもコメディもない。陰か陽で言えば、陰。シリアスな世界だ。
少なくとも人が死ねるくらいには。
　霞「探偵さーん」
年甲斐もなくかわいらしい、聞き慣れた声が扉越しに響く。ここは俺（優）の探偵事務所（木造）だ。
と、言っても事件などを取り扱ったことはない。どちらかというと何でも屋だ。
　霞「優ちゃーん」
霞、三十代の女性。ちなみに俺は二十歳。
どっちにとっても痛いので、嫌々ドアを開けることにした。ちなみに俺はツンデレではない。
　優「頑張り過ぎだろ、おばあちゃん」
　霞「熟女萌えっていいよね」
　優「少なくとも、俺は遠慮する」
とりあえず、いつもの定位置に座る。ちなみに霞とは何の過去もない。
出会って随分経つが会話しかしていない。一応、依頼主のはずなんだが。
　霞「今日は初依頼よ」
　優「さっそく、地の文に反したな」
　霞「私はそういう女よ」
ここは軽く流すことにする。
　優「よし、本題入るか」
　霞「釣れないのね。まあ、いいわ。桜」

扉が再び開き、俺と同い年くらいの女性が入ってきた。
優「いたなら一緒に入ればよかったんじゃないか？」
桜「なんか恥ずかしいだろ」
霞「人見知りなのよ」
優「初対面だけど、絶対違うと思う」
桜はそのまま霞の隣の席に着く。
桜「人見知り萌え失敗だな」
霞「さすがに無理があったわね、キャラ的に」
優「マジ、本題入ろう」
桜「弁天倒すぞ、弁天」
弁天、初代魔法少女。もちろん女性。ちなみにそういうイレギュラーは今のところない。魔法少女はみんな女性だ。電脳技術、魔法の開発者とも言われている。この情報は探偵として微妙と判断するが。
優「そこでなぜ俺なんだ？」
霞「あら、鈍いわね。魔法は言葉の力。読解力。探偵にぴったりじゃない」
優「人殺しはぴったりじゃないけどな」
霞「優しいのね」
桜「優だけにだな」
ここは流すことにしよう。
優「ちなみに目的は？」
桜「このままだとプー太郎ということに気付いてな」
霞「それはいいことね。よくやったわ」
優「いや、知らねぇよ」
霞「あら、他人事じゃないでしょ。この辺りではお人好しで好かれているみたいだけど」
優「まあ、正直痛いところだな」
桜「で、プー仲間を誘いに来たわけだ。世界に干渉出来ないのは寂しいだろ？」
優「確かに暇だな」

霞「もう行くしかないっしょ」
優「人殺しにか？」
桜「楽しいぞ、世界に触れるのは。そううだな、おまえが付いて来れば、止められるかもしれないだ　　ろ？」
霞「それを言われたら行くしかないよね」
優「そうだな」
霞「さすがお人好し」
優「褒め言葉にしておくよ」
霞「あら、褒めてるのよ」
優「それはどうも」
桜「じゃ、行くか」
その時、天井の扉が開き梯子が下りてきた。いわゆる天井裏というやつだ。
　エンデ「やったるばい」
天井裏に潜んでいたのは見た目十二歳程の少女。そう潜んでいた。住まわした覚えはない。
ちなみに付き合いは霞より少し長い。
霞「出たわね妹」
桜「そう言えば似ているな」
優「分な。そういうことでおまえの目はおそらく腐っている」
桜「マジで、眼科行くか」
エンデ「男のツンデレは見苦しいで、兄ちゃん」
優「おい、ダンどこだ」
天井裏からさらに見た目三十代くらいの男性が降りてくる。見た目は若いが実年齢はそれ以上だろう。
なんたって、エンデのおじいちゃんだからな。その年上を呼び捨てにするのは、友達ということで。
親しき仲に礼儀はいらない。と、少なくとも俺は思う。それじゃ寂しいからな。
　ダン「おう、ここだ」

優「おまえもそこかよ。画的にシュールだな」
ダン「正直、泣きそうだよ」
エンデ「冗談きついわ、じいちゃん」
ダン「冗談だとよかったんだがな」
エンデ「なんでやねん」
ダン「そうらしい。もう妹にしてくれると俺もありがたいよ」
霞「その心配はもうないわ。このメンバーで住むことになるから」
優「それこそ、なんでやねん、だな」
ちなみに住宅区画はなくワンフロアだ。広さはまあ、十分だが。
霞「いいでしょ？」
優「まあ、いいけど」
ダン「相変わらず、霞には弱いみたいだな」
優「嫌な、おばあちゃんだよ」
ダン「腐れ縁だな」
優「おまえらもな」
エンデ「これで正式に妹やな、兄ちゃん」
優「もうそれでいいよ」
桜「妹萌えか。王道だな」
優「もうそれでいいよ」
エンデ「よーし、話戻して、やったるばい」
優「おまえとダンは留守番な」
エンデ「妹に待っててほしいってやつやな」
優「もうそれでいいよ」
と、いうことで俺と霞、桜は弁天の元に行くことになった。

プロローグ（中）

弁天の居場所は「白夢」という電脳空間だ。
電脳空間だが別次元にあるわけではない。
場所は日本列島の一部。
なぜ電脳空間と言われているかというと、その一帯の粒子が電脳化しているからだ。
よって、その能力があれば自由に空間を創り変えることができる。
そこにあったもの全てを白紙にして。まさに夢の世界というわけだ。
そして弁天は和を重んじるようだ。
今俺達がいるのは少し大きめの鳥居の前。その先には横にだだ広い神社がある。無論、ここにこんな場所はなかった。どこかの街だったはずだ。住人がどうなったかは、想像通りだろう。周りに人の気はないが、少し離れた所には廃ビルなどの街の名残がある。
街のど真ん中に馬鹿でかい神社があることになる。
さて、話を戻すと。鳥居の前には一人の女性がいる。俺と同い年くらいだろう。弁天には会ったことはないが、おそらく違う人だ。

桜「よう、セっちゃん」

セツナ「その人が霞の言っていた人ね。桜は誰とでも合う性格じゃないけど、問題なかったみたいね。

それはそれで、ちょっと複雑だけど」

桜「百合萌えだな」

優「もう何萌えでもいいよ」

霞「ちなみにセっちゃんは、あの歌姫なのよ。すごいでしょ」

優「それは、まあ、すごいな」

歌姫。声だけの歌手。初めはネット配信だけだったが、今やあらゆるメディアに精通している。
老若男女、知らない者はいないだろう。ここまできたら、もはや前

例がない程だ。生きながらに、教科書に載る程の偉人となったくらいだろう。
霞「反応薄ーい、つまんない」
優「その歳でそういうしゃべり方は痛いと思うぞ」
霞「まだまだ甘いわね。痛さの中に萌えがあるのよ」
優「おまえらはどれだけ萌えを押すんだ」
セツナ「とにかく、私の事は気にせずに、どうぞ」
鳥居の正面に立っていたセツナはそう言って道をあける。
優「護っていた風だったが、いいのか？」
セツナ「気にせずどうぞ」
優「めちゃくちゃ気になるんだが」
桜「いわゆる探偵心というやつか？」
優「いや、普通に。歌姫ならなおのことな」
セツナ「それはとりあえず、弁天に会ってからでもいいと思うよ」
優「そこまで言うなら、そうするか」
桜「よし、行くか。ああ、戦闘は私がやるから」
優「俺は読解というわけか」
桜「そうだな、一人でしか戦ったことなかったし、そうさせてもらおうか」
優「霞はどうするんだ？」
霞「見物」
優「ああ、そう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8838z/

電脳遊戯

2011年12月29日21時50分発行